

《ホーファー、またはティロルのテル》

— 英語版《ギヨーム・テル》と二つの告知ピラ —

水谷 彰良

初出は『ロッシニアーナ』（日本ロッシニア協会紀要）第32号（2011年発行）の拙稿『ホーファー、またはティロルのテル』。書式と図版を変更してHPに掲載します。
(2012年4月)

圧制に対する反乱を描いたロッシニア《ギヨーム・テル》（1829年パリ初演）は、題材がフランス以外の国々の検閲に抵触すると危惧され、作曲者の祖国イタリアでもカリスト・バッシ（Calisto Bassi, 1810 以前[1800?]-1860c）が革命的言辭や政治性を弱めて翻訳したイタリア語版によって初演された（1831年9月17日ルッカにおける《グリエルモ・テル *Guglielmo Tell*》）。イタリアで2番目の上演となる1833年春のナポリでは《総督ジェスレルとグリエルモ・テル (*Il governatore Gessler e Guglielmo Tell*)》の改題と新たな単語変更を余儀なくされ、続く1836年ミラーノのスカラ座では人物と設定を完全に變更し、《ヴァッラーチェ (*Vallace*)》として舞台にかけられたのだった¹。

《ギヨーム・テル》のパリ初演から僅か9ヵ月後に行われたイギリス初演も同様で、1830年5月1日にドルリー・レーン王立劇場 (Theatre Royal, Drury Lane) で上演されたのは、《ホーファー、またはティロルのテル (*Hofer, or The Tell of the Tyrol*)》と題された英語版の「3幕の歴史的オペラ (an historical opera [in three acts])」であった。この英語版《ホーファー》の台本は、《ギヨーム・テル》の台本の英訳ではなく、イギリスの劇作家ジェイムズ・ロビンソン・プランシェ (James Robinson Planché, 1796-1880) が主人公テルを実在のティロルの英雄アンドレアス・ホーファー (後述) に置き換えて翻案改作し、音楽はヘンリー・ビショップ (Sir Henry Rowley Bishop, 1786-1855) がロッシニアの原曲を用いて再構成したものである (レシタティブの多くは散文の台詞と対話に置き換え)。



ビショップの肖像画(筆者所蔵)

ティロルの自由を求めて戦った愛国者、それが英語版《ホーファー》の主人公アンドレアス・ホーファー (Andreas Hofer, 1767-1810) である。その生涯は波乱に富むので略歴を記しておこう²。

アンドレアス・ホーファー Andreas Hofer (1767年11月22日 南ティロル St Leonhard in Passeier [現在はイタリア San Leonardo in Passiria] 生~1810年2月20日 マントヴァ没 [銃殺刑にて]。ティロルの自由のために戦った愛国者)

父の家業である宿屋の主人を継いだホーファーは、1790年に22歳でティロル州議会議員となり、1797年には射撃部隊の隊長としてフランス軍と戦った。だが、1805年にアウステルリッツの戦いでオーストリアが破れると、ティロルはプレスブルクの講和によりバイエルン (ババリア) 王国に帰属させられる。ホーファーはここで宿屋の経営者に戻ったが、1809年にフランスとオーストリアの間に戦争が起きると兵を起し、フランス・バイエルン軍に対する反乱で勝利すると、同年8月インスブルックにて元首の地位に就いた。しかし、2ヶ月後にはフランス軍の反撃で敗走を余儀なくされ、11月にはティロル軍の降伏文書に署名する。その後ホーファーは逃亡したが、友人の裏切りにより逮捕され、移送されたマントヴァで軍法会議にかけられ、1810年2月20日、ナポレオンの命により銃殺刑に処せられた。遺骸は王政復古後の1823年にマントヴァからインスブルックに移送され、宮廷教会に埋葬された。

こうしてみると、架空の人物であるヴィルヘルム・テル (ギヨーム・テルの基となるシラー原作の主人公) と実在のホーファーの間には、多くの類似点が見出せる。ティロル独立戦争の英雄であると同時に、射撃の名手とされるからだ (テルは弓矢であるが)。もちろんホーファーのフランス軍やバイエルン軍に対する戦いは、当時の文脈で言えばオーストリア側に立ってのことで、テルがハプスブルク家の支配と戦ったのとは違うものの、両者のイメージは似通っている。そして王政復古後に改めてティロルの英雄として名誉回復を果たしたことから、ホーファーの生涯はヨーロッパで広く知られるところとなり、文学や演劇の題材にされたのだった。

英語版のオペラ《ホーファー》について、筆者の知りうることを記してみよう。

初版台本の記載と二つの上演告知ピラ

英語版《ホーファー》に関する本格的な研究はまだ行われていないが、ロッシニア財団の全集版《ギヨーム・テル》校註書の中に、初版台本のタイトル頁記載が転記されている³。そこにはサー・ウォルター・スコット『ナ

ポレオン伝』の一節——「ティロルの防衛はウィリアム・テルの記録と同じほどの英雄的偉業で歴史の一頁を満たしている」——が引用され、テルをホーファーに置き換える改作者の意図が示されている。

HOFER, / THE TELL OF THE TYROL; / AN HISTORICAL OPERA, / IN THREE ACTS; / BY / J.R.PLANCHE. / THE MUSIC ENTIRELY FROM THE CELEBRATED OPERA / GUILLAUME TELL, / COMPOSED BY ROSSINI. / SELECTED AND ADAPTED TO THE ENGLISH STAGE BY / H.R.BISHOP. / 《The defence of the Tyrol fills a page in History as heroic as that / which records the exploits of William Tell.》 / *Sir Walter Scott's Life of Napoleon.* / FIRST PERFORMED AT THE / THEATRE ROYAL, DRURY LANE. / SATURDAY, MAY 1, 1830. / LONDON: / Printed by Joseph Mallett, 59, Wardour Street, Soho, / FOR THE PROPRIETORS, / GOULDING AND D'ALMAINE, 20, SOHO SQUARE. / PRICE ONE SHILLING

1830年5月1日にドルリー・レーン王立劇場で行われた初演は一定の成功を収め、シーズン中に12夜の上演が行われ、翌シーズンにも再演をみた⁴。筆者は1ヵ月後の1830年6月3日の告知ビラを所蔵しているのも、その題字部分を転記しておきたい（複製は本稿末尾に掲載）。

Theatre Royal, Drury Lane. / This Evening, THURSDAY. June 3. 1830, / His Majesty's Servants will act a New New GRAND HISTORICAL OPERA, called / HOFER, / THE TELL OF THE TYROL. / The MUSIC entirely from the celebrated Opera, GUILLAUME TELL, composed by ROSSINI; / Arranged and adapted for the English Stage by Mr. H.R. BISHOP.

《ホーファー》の配役と主な歌手たち

1830年6月3日の告知ビラに書かれた配役は、次のとおりである。

Bavarians--- The Commandant of Innsbruck, Mr. THOMPSON,
Colonel Donner, Mr. BLAND
Herr Stetten. (*Cirole Captain of the District*) Mr. WEBSTER,
Batz, Mr. SALTER,
Officers, Messrs. HOWELL, FENTON, WIELAND, CHIKINI.
Tyrolese --- Andreas Hofer, Mr. H. PHILLIPS,
Father Joachim Haspinger, (*a Capuchin*) Mr. BEDFORD,
Gottlieb. (*a Substantial Farmer in the Pusterthal*) Mr. YARNOLD,
Walther, (*a Young Peasant of the Lower Innthal*) Mr. SINCLAIR,
Stephen, Mr TAYLEURE,
Karl, (*Gottlieb's Son,*) Miss CHIKINI,
Bertha, (*Gottlieb's Daughter*) Miss STEPHENS,
Josephine Negretti, (*her Cousin, a native of Belluno*) Madame VESTRIS,
Margaretta, (*Keillerin of a Tavern*) Mrs. NEWCOMBE,
Peasants--- Therese, Mrs. BEDFORD,
Maria, Miss FAUCIT,
Principal Dancers, with a numerously extended Corps de Ballet:—
Miss RYAL, and Miss MACDONALD,



ホーファーの銅像
(インスブルックにて筆者撮影)

フルネームが書かれていなくても、主演メンバーは名前だけでそれと判る有名歌手である。主役ホーファーを歌った H.フィリップス氏 (Mr. H. Phillips) は、歌曲の作曲者でもあるバスまたはバリトン歌手ヘンリー・フィリップス (Henry Phillips, 1801-1876) である。少年歌手としてキャリアを始めたフィリップスはオラトリオ歌手を経て、1824年にコヴェントガーデン劇場のアーン《アルタクセルクセス》でロンドン・デビューし、《ホーファー》では「難しい音楽を見事に演奏し、名声をさらに高めた」と評された (『タイムズ (Times)』⁵)。

ヴァルター役のシンクレア氏 (Mr. Sinclair) はスコットランド生まれのテノール、ジョン・シンクレア (John Sinclair, 1791-1857) である。1810~20年代にロンドンの舞台上で活躍したシンクレアは、その間パリやミラーノに留学して声楽を学び直した。1821



シンクレアの肖像画
(筆者所蔵)

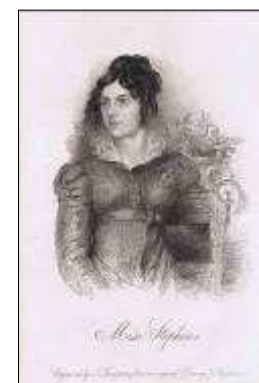
年にナポリでロッシーニの教えを受けてイタリアでのキャリアを開始し、1823年にヴェネツィアで行われた《セミラーミデ》初演でイドレーノ役を創唱した⁶。しかしイタリアでの活動は短く、1823年春のジェノヴァで終止符を打ってロンドンに戻り、約10年間同地の舞台上で活躍して引退した。《ホーファー》の初演では、「アリアが彼の声によく適合され、いつも以上に活気に満ちて演じた」と評されている（『タイムズ (Times)』）⁷。

ジョゼフィーヌ・ネグレッティ役のヴェストリス夫人 (Madame Vestris) は、フルネームをルシア・エリザベス・ヴェストリス (Lucia Elizabeth Vestris [生名: エリザベッタ・ルチア・バルトロツィ Eliza-betta Lucia Bartolozzi], 1797-1856) というコントラルトである。1813年にイタリア系フランス人の舞踏家オギュスト＝アルマン・ヴェストリス (August-Armand Vestris, 1788-1825) と結婚してヴェストリス夫人となり、1815年にロンドンのキングズ劇場にデビューした。彼女はロッシーニ作品のイギリス初演に参加したことで知られ、1821年3月10日に《泥棒かきさぎ》ピッポ、1823年2月18日に《湖の女》マルコム、同年6月5日に《リッチャードとゾライデ》ゾミーラ、同年7月3日に《マティルデ・ディ・シャブラン》エドアルド、1824年1月24日に《ゼルミーラ》エンマ (ロッシーニのロンドン訪問時の上演。ゼルミーラ役はイザベッラ・コブラン)、同年7月15日の《セミラーミデ》でアルサーチェ役を歌っている (いずれもイギリス初演。《セビーリヤの理髪師》ロジーナとしても重要)。ヴェストリス夫人は、1826年4月12日にコヴェントガーデン歌劇場で初演されたカール・マリア・フォン・ウェーバー《オーベロン、または妖精王の誓い (Oberon, or The Elf King's Oath)》ファティマ役の創唱でも知られるが、歌手活動は1820年代が頂点で、1830年以降は劇場経営の活動に力を注いだ⁸。



ヴェストリス夫人の肖像画

ベルタ役のスティーヴンス嬢 (Miss Stephens) は、ソプラノ歌手にして女優のキャサリン・スティーヴンス (Catherine Stephens, 1794-1882) である。コヴェントガーデン劇場には1813年にアーン《アルタクセルクセス》マンダーネ役でデビューし、1823年まで出演して高い評価を受け、続いてドルリー・レーン劇場で活躍した。《ホーファー》では「持ち前の繊細で甘美な歌唱」を評価され（『タイムズ』）⁹、1835年に引退した。その後1838年に第5代エセックス伯ジョージ・カペル＝コニングズビー (George Capel-Coningsby, 5th Earl of Essex, 1757-1839) と結婚し、伯爵夫人となっている (当時エセックス伯は80歳で、翌年没した)。



スティーヴンス嬢の肖像画
(筆者所蔵)

以上4人は1820年代のロンドンで活躍し、前記のようにシンクレアはロッシーニの《セミラーミデ》初演でイドレーノ役を創唱、ヴェストリス夫人はロッシーニ作品のイギリス初演に複数出演し、1824年にロンドンを訪問したロッシーニとも交際があった。¹⁰

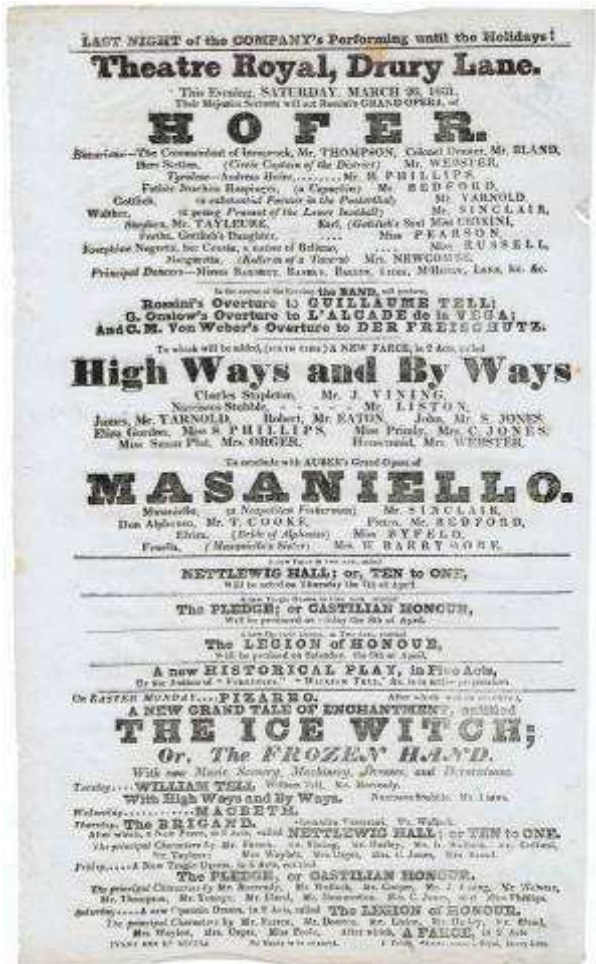
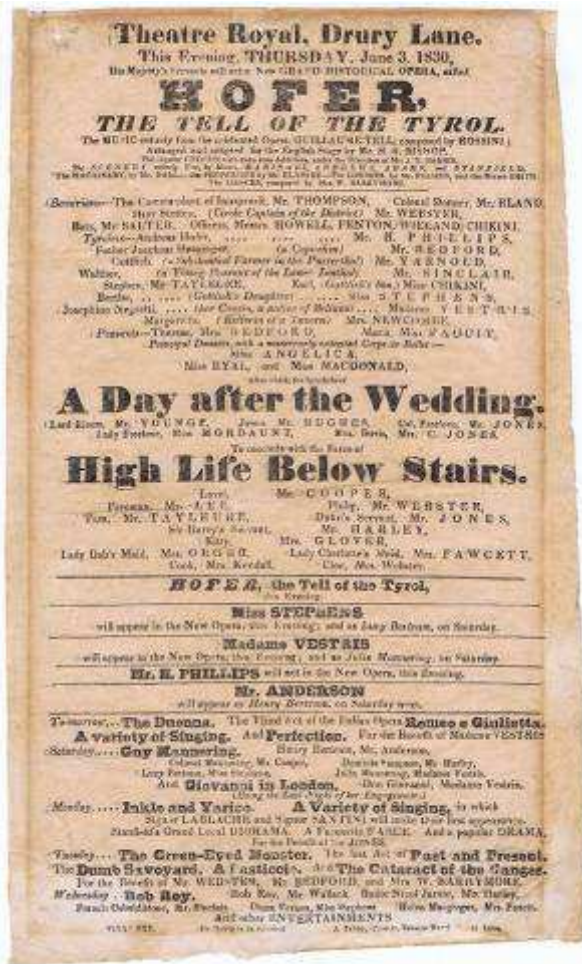
英語版《ホーファー》のその後

ビショップ編の英語版《ホーファー》は、ほどなくカール・アウグスト・フォン・リヒテンシュタイン (Carl August von Lichtenstein, 1767-1845) によってドイツ語に翻訳され、初演5ヵ月後の1830年10月18日ベルリンにて、《アンドレアス・ホーファー (Andreas Hofer)》の題名で上演をみた¹¹。ロンドンでは翌1831年に再演され、筆者は同年3月26日の上演告知ビラも所蔵しているが、主要8人は初演と同じ顔ぶれである (本稿末尾に複製)。この告知には《マザニエロ (Masaniello)》と改題されたオペラ《ポルティシの口のきけない娘》も書かれており、当時ロンドンで革命的題材のオペラが一定の人気を得たことが判る。

その後1838年12月3日に、新たな英語版《ホーファー》がドルリー・レーン劇場で初演されている。これはアルフレッド・バン (Alfred Bunn, 1796-1860) が新たに作成した英語台本に、ビショップが再編曲した音楽を付したものである¹²。この新・英語版に関する興味深い資料に、大英図書館が所蔵する《ギョーム・テル》ピアノ伴奏ヴォーカルスコア (Goulding & Dalmaine, London, 1829) があり、そこにはビショップの筆跡による新・英語版のための改訂が施されているという (例: N.3の短縮、N.12の改作、N.13からのアルノルド役の除去)¹³。

ロンドンではこの新・英語版《ホーファー》に続いて、《ギョーム・テル》のイタリア語ヴァージョンが1839年7月11日にハー・マジェスティーズ劇場で上演されている。フランス語《ギョーム・テル》の初演は6年後の1845年6月6日にコヴェントガーデン王立劇場で行われ、ロンドンの聴衆はここで初めてオリジナル・ヴァージョンの上演に接することが出来た。

英語版《ホーファー》が第三者による改作であることから、本格的な研究はまだ行われていない。けれども1818年の《イギリス女王エリザベッタ》を嚆矢とするロンドンのロッシーニ作品受容の理解に、《ホーファー》の研究は不可欠であろう¹⁴。



《ホーファー》の告知、1830年6月3日(左)と1831年3月26日(右) Collezione privata di Akira Mizutani, Tokyo

- 1 イタリアでの初期上演については水谷彰良「ロシーニ《ヴァッラーチェ》第4幕フィナーレのストレッタ」(『ロッシニアナ』日本ロシーニ協会紀要、第27号、2005年所収)を参照されたい。
- 2 ネット版 Österreich-Lexikon encyclopaediaを基に、他の伝記的記述を参照して要約。
- 3 *Guillaume Tell; Edizione critica delle opere di Gioachino Rossini, I-39*, a cura di M. Elizabeth C. Bartlett, 4-vols, Fondazione Rossini, Pesaro, 1992., *Commento critico*. p.62.
- 4 Fenner, Theodore., *Opera in London, Views of the Press 1785-1830*, Southern Illinois University Press, Carbondale and Edwardsville, 1994., p.40.
- 5 Fenner.,op.cit.,p.539. ヘンリー・フィリップスの略伝と同時代評価は同書 pp.535-540.を参照されたい。
- 6 イタリアでのシンクレアの主なロシーニ作品出演に、1822年夏モデナのコンナーレ劇場における《エドゥアルドとクリスティーナ》スウェーデン国王カルロ、同年秋フィレンツェのテアトロ・デリ・アカデーミチ・インフオカーティ (Teatro degli Accademici Infuocati) における《パルミーラのアウレリアーノ》タイトルロール、1822/23年謝肉祭期間ヴェネツィアのフェニーチェ劇場における《マオメット2世》パオロ・エリツと《セミラーミデ》初演のイドレーノ、1823年春のジェノヴァ、ファルコーネ劇場 (Teatro del Falcone) における《湖の女》ジャコモ5世と《ゼルミーラ》イェロ役がある。いずれもジョヴァンニ・シンクレア (Giovanni Sinclair) の名前で出演。
- 7 *ibid.*,p.530. (ジョン・シンクレアの略伝と同時代評価は同書 pp.527-530.を参照されたい)。
- 8 ヴェストリスについてはグローヴ音楽事典の項目「Vestris」及び Fenner.,op.cit.,pp.551-555.参照。
- 9 Fenner.,op.cit.,p.571. なお、キャサリン・ステューヴンスの略伝と同時代評価は同書 pp.564-571.参照。
- 10 ヴェストリス夫人の主要文献に Williams, Clifford John. *Madame Vestris: A Theatrical Biography*, London, Sidgwick and Jackson, 1973.と Appleton, William H. *Madame Vestris and the London Stage*, New York, Columbia University Press, 1974.があるが、ロシーニや《ホーファー》に関して僅かな記述しかない。
- 11 初版台本のタイトル記載は、Andreas Hofer; *grosse Oper mit Ballet in 4 Aufzügen; nach dem Inhalte der englischen Oper gleichen Namens von Planché; zur beibehaltenen Musik von Rossini; für die deutsche Bühne frei bearbeitet von dem Freiherrn von Lichtenstein*.
- 12 次の文献は、この新・英語版を4幕のオペラ《ギヨーム・テル *Guillaume Tell*》としている。Griffel, Margaret Ross. *Opera in English, A Dictionary*, Greenwood Press, Westport, 1999., p.253.
- 13 *Guillaume Tell; Commento critico*, p.43.
- 14 Griffel,op.cit.,p.276.は《ホーファー》のリブレットとして「English, Fitzball version (London: J Cumber- land, [1832])」を掲げている。しかし、筆者はこれがオペラと無縁な芝居の台本と確認済みである(現物入手)。こうしたお粗末な点にも、《ホーファー》の基礎研究の遅れが読み取れる。